

『和漢朗詠集』所收唐詩注釋補訂（十五）

植 木 久 行

●二四三番 白居易「八月十五夜、諸客と月に月を翫ぶ」
〔嵩山表裏千重雪、洛水高低兩顆珠〕

○大和八年（八三四）八月十五日、作者六三歳、東都洛陽での作（花房・朱）¹。太子賓客分司在任。「月光 雪の似く、又た珠の似きを言ふ」（東京大學本『私注』）、清新な對句（韻聯）。履道里の自宅での作であろう。『白氏文集』（金澤文庫本「白氏後集卷六十五」・南宋紹興刊本「ただし補抄の部分」・那波本等）は、詩題を「八月十五日夜、同諸客翫月」に作るが、「日」の字は衍字であろう。『六注』（六地藏寺本）は、「八月十五夜、同諸客翫月」と題し、貞和本『和漢朗詠集』も、諸客を「詩客」に誤る以外は同じである。内閣文庫藏『私注』の「八月十五夜、翫月」、『千載佳句』（鎌倉時代書寫の古鈔本）時節部・八月十五夜の「八月十五夜」は、ともに略題である

が、「八月十五夜」に作る點では同一である。この表現は、二四三番（既出）の詩題「八月十五夜、禁中に獨り直して……」の例と同じである。前稿「補訂（十四）」²参照。

○「嵩山」 洛陽市の東南方向に連なる秀麗な山なみ。切り立つ華山とは異なつて、群峰が連綿と連なる山容を特色とする。大曾根注の「洛陽の西南に位置す」³は、柿村『考證』の誤りを受けたものであり、「洛陽の南方にそびえる」（川口注）とするよりも、「洛陽の東南」（菅野注）とするほうが、より正確である。詳しくは、松浦友久編『漢詩の事典』第三章や、拙著『唐詩の風景』第二章参照。中唐の孟郊「洛橋（洛陽城内を貫流する洛水に架かる東都第一の名勝、天津橋）の晚望」詩にいう、「月明らかに 直ちに見る 嵩山の雪」と。
○「表裏」 「山の彼方と、こなた」（金子『新釋』）。表は

外、裏は内を意味し、すみずみまで遍く、到るところ、の意で用いられることが多い。たとえば、劉宋の鮑照『文選』卷二八「結客少年場行」の、「高きに昇りて四關に臨み、表裏に皇州を望む」、また初唐の宋之問「晚に湘江に泊す」の、「況んや復た秋雨霽るるをや、表裏に衡山を見る」など。

○「千重雪」 『私注』には、初唐の李嶠りやまうの詩「雪」(百二十詠の一)の、「地は疑ふ(似る)の類語) 明月の夜か」とを引く。これは、白銀色にきらめく雪原を、月光の降り注ぐ光景に見立てた表現であり、白詩は、その逆の發想である。

○「洛水」 柿村『考證』以來、川口・大曾根・菅野注に見える、「洛陽の南を東流して黃河に注ぐ」(一例、菅野注)とする説明は、きわめて讀者の誤解を招きやすい。というのは、中唐の姚合の詩「天津橋に晴望す」に、「清洛 城心を貫く」と歌われるように、洛水は東都洛陽の中央部を東流するからである。この意味で、書陵部本『朗詠抄』⁽⁵⁾に見える一説「都ノ内ヲ流レタル河」とするのが妥當であり、注釋の執筆には、細心の注意が望まれよう。

○「兩顆珠」 本詩より十年前の長慶四年(八二四)に成る白詩「春 湖上に題す」にいう、「月は波心に點ず 一顆

の珠」と。これは、西湖の眞ん中(波心)に映る白い月を、一顆ひとつぶの眞珠に見立てた表現である。本詩は、この見立てを擴大して、水面だけでなく天空の月をも、眞珠に見立てた表現。ちなみに天空の月を眞珠に見立てた例としては、中晩唐の張祐「中秋の夜、杭州にて月を見る」(『全唐詩』卷五二一)の、「珠の 浦を出でて盈つるが如し」があげられよう。

●二五二番 白居易「秋月」「誰人隴外久征戍、何處庭前新別離」

○元和十二年(八一七)、作者四六歳、江州(江西省九江市)での作。江州司馬在任(花房・朱)。詩題は、『白氏文集』卷十六(南宋紹興本・那波本等)や『六注』・東京大學本『私注』等には、「中秋月」に作るが、北宋初期の『文苑英華』卷一五一(明版)、月の條には、「秋月」に作る。⁽⁶⁾さらに内閣文庫藏『私注』、貞和本・正安本『和漢朗詠集』等にも「秋月」と題する。そして本詩の尾聯を引く『千載佳句』天象部・月にも、「秋月」と題している。⁽⁷⁾ここでは、「詩の句に満月のことを述べていないから秋月と題する方が適當のやうである」(佐久注『續國譯漢文大成』)とする指摘をも参照して、本來の詩題は「秋月」であったと考えるべき。田中克己『白樂

天」(集英社・漢詩大系)も、この佐久説を受けて、「詩意から、一本に秋月と題しているほうが合う」と述べ、菅野注にも、「嘉禎本(尊經閣文庫藏寫、卷子本…引用者注)以下の題が、『文苑英華』に一致するのは、やはり古い形を傳えているのであろう」という。

○「誰人」「誰」「何人」の類語。白詩の用例は十五に及ぶ。立野春節跋の和刻本には、「誰人」と訓む。

○「隴外」隴山の外、つまり隴山以西の地を指し、邊境・塞外の意を帯びる。隴山とは、現在の陝西・甘肅の省境をなす険しい山脈の名。華・夷(内地と塞外)を隔てる境界として、漢代以來、大震關などの關所が置かれ、異民族の侵攻を防いだ。漢魏ごろの「隴頭歌辭」以下、出征兵士の望郷の念と隴山(守備兵の駐屯地、戰場)とを結びつけた擬古樂府詩「隴頭」「隴頭水」などが作られている。『漢詩の事典』第三章、甘肅省の「隴山・隴水」の條参照。川口・大曾根譯に、漢代の郡名を用いて、「隴西郡の西」とするのは、かえってわかりにくい。盛唐の岑參の詩「西河太守杜公の輓歌」(其三)の、「今に至るまで聞く 隴外、戎虜は(杜公の勇武を憶って) 尚ほ魂を」ふとは、「隴外」の語を用いた一例である。

○「何處庭前」古訓には「何れの處の庭前にか」とある

『和漢朗詠集』所収唐詩注釈補訂(十五)(植木)

が、對句をなす上句「誰の人(誰の人)か隴外に」の古訓を参照すれば、金子『新釋』のごとく、「何れの處か庭前に」と訓むほうが適切である。岡村繁『白氏文集』三(竹村則行執筆)も、この立場である。ちなみに、庭前は、「庭中」の類語。

○「新別離」「遠く旅立つ人と別れを惜しんでいる」(川口譯「文庫」)、「新たに旅立つ人を月の光で見送っている」(菅野注)などは、「新」の意味を取り違えた誤譯であろう。というのは、本詩の「新」は、上句の「久」に對する副詞として、近ごろ、最近の意であり、愛する夫を出征させてまもない妻、いわゆる思婦の嘆きを歌い、上句の出征兵士のそれと對照させた表現だからである。この「新」の字を、「初」(今しも…したばかり)の類語と見なした譯「何處の庭前で今別れたばかりの男女二人」(岡村「竹村」譯)もあるが、従うことはできない。

●二五三番 郢展「汗水より東に歸る 卽事」「秋水漲來船去速、夜雲收盡月行遲」

○唐代七言詩の佳句(一聯)を類聚した大江維時撰『千載佳句』四時部・秋夜に、「郢展／汗水東歸詩」とあり、『全唐

『詩逸』卷中は、これに基づいて収録する。また東京大學本『私注』にも、「汴水東皈、郢展」とする。皈は歸の異體字である。詩題の「汴水東歸卽事」は、ひとまず正安本『和漢朗詠集』や『集註』等に従う。ちなみに、内閣文庫藏『私注』は、「汴水東滿」（汴水 東に滿つ）と題する。汴水は、汴水の音訛であろう。

○「郢展」 未詳。姓を郢とする人名は通常見えず、傅瓊琮ほか編『唐五代傳記資料綜合索引』⁽¹³⁾にも、『全唐詩逸』によって著録した郢展以外はなく、方積六ほか編『唐五代五十二種筆記小説人名索引』⁽¹⁴⁾には、全く見えない。また「野郢展」⁽¹⁵⁾「野展」にも作るが、野詩・野利の姓はあるが、野一字を姓とする人名は見いだしたい。周祖譔主編『中國文學家大辭典（唐五代卷）』、郢展の條には、「世次不詳」としてこういう、「和漢朗詠集」卷上作野郢展。唐代人。曾自汴水東歸、卽事賦詩。餘不詳」云々と。本條の執筆者陳尙君は、かつて『全唐詩』補遺六種札記⁽¹⁶⁾のなかで、「郢展、『和漢朗詠集』卷上作野郢展、疑爲日人」と述べていたが、大江維時撰『千載佳句』の編纂方針（唐代の中國の詩人「ただし、新羅・高麗の詩人を含む」の佳句を集める）を考慮して、その説を改變したのであろう。いずれにしても郢展の事跡は、現在なお未詳の

ままである。

○「汴水より東に歸る 卽事」 書陵部本『朗詠抄』にいう、「郢展、汴水ト云河ヲ、東サマニ、我カ家歸トテ作也」と。汴水は、大業元年（六〇五）、隋の煬帝が完成させた「通濟渠」の東段部分、すなわち華北の黃河から東南方向に汴州（河南省開封市）・宋州（商丘市）を経て、華中の淮河にそそぐ區間に對する、唐・宋期の通稱である。汴河・汴渠ともいい、煬帝が造った大運河の中心をなす。『漢詩の事典』第三章、汴河の條參照。「卽事」は、「その場のできごとに即して」の意から、眼前の景物に即して即興的に詠んだ詩をいう。戴叔倫「湘南卽事」、司空曙「江村卽事」のごとく、詩題にもよく用いられる。

○「漲來」 來は、動態の完成を表す助字。下句の「盡」と對をなす。

○「夜雲收盡」 收盡の語は、雲の消失をいう。晚唐の喻坦之「長安雪後」詩にも、「碧落（天空） 雲收盡す」とある。

●二五四番 白居易「蕭處士の 黔南に遊ぶを送る」「不醉黔中爭去得、磨圍山月正蒼蒼」

○元和十四年（八一九）、作者四八歳、忠州（臨江縣、現在の重慶市忠縣）での作。忠州刺史在任（花房・朱）。内閣文庫・東京大學藏『私注』や『六注』などに見える詩題「黔南の蕭處士を尋ねて逢はず」（尋黔南蕭處士不逢）は、尾聯の上句を「黔中に酔はずんば……」と誤讀したために生じたものらしい。

○「蕭處士」名は未詳。白詩「蕭處士を招く」（卷一一）や、「戯れに蕭處士・清禪師に贈る」（卷一八）に見える人物である。いずれも忠州での作（後藤昭雄はか『類聚本江談抄』⁽¹⁷⁾や、朱『箋校』。川口久雄・奈良正一『江談證注』⁽¹⁸⁾（二二七番）は、田中克己『白樂天』の説を受けて、「蕭悦。官は協律郎に至った。雅趣ある竹を描いて、當時評判が高かった。白居易はのち杭州で親しく交遊した」と述べ、近年の後藤昭雄『江談抄』⁽¹⁹⁾第四（五四番）も同じく「蕭悦」のこととするが、誤りであろう。この蕭處士が、杭州刺史時代の白居易の部下、「畫竹の歌」（引を并す、卷一二）に詠まれた蕭悦を指す確證はない。このことは、吳汝煜・胡可先『全唐詩人名考』⁽²⁰⁾や陶敏『全唐詩人名考證』⁽²¹⁾のなかに、その名に言及しないことによってもわかる。

○「黔南」唐代の方鎮（藩鎮）の一つ、黔南觀察使の置
『和漢朗詠集』所収唐詩注釈補訂（十五）（植木）

かれた黔州（≡黔中郡）彭水縣を指す。その縣城（≡州城）は、現在の重慶市彭水苗族土家族自治縣（四川省彭水縣は、その舊稱）である。當地には、黔州を含め、その南方の地を廣く管轄する黔中觀察使の使府が置かれた。この黔中觀察使はまた、黔南觀察使（經略使）、黔州觀察使などとも呼ばれたのである。吳廷燮⁽²²⁾『唐方鎮年表』⁽²³⁾卷六、黔中の條や、郁賢皓『唐刺史考全編』⁽²⁴⁾四、卷一七五、黔中道黔州（黔中郡）の條など参照。竇群の詩「京より將に黔南に赴かんとす」は、元和三年（八〇八）、黔中觀察使となった作者の赴任直前の作であり、顧非熊の詩「皇甫司祿の 黔南の幕に赴くを送る」も、黔中（黔南）觀察使の幕府（使府）に赴く皇甫某を見送る作である。つまり、この黔南は、黔州彭水縣（現在の重慶市に屬する）を指し、「今の貴州省の地」（『江談證注』）、「唐代の道名」（西村富美子『白樂天』）、「黔州（四川省東南部）の南」（後藤『江談抄』）ではない。ちなみに、忠州から黔南（黔州）に赴くには、一般に長江を溯り、涪州（涪陵縣、現在の重慶市涪陵區）から、涪陵江（≡黔江、長江の支流。烏江「現在の名稱」の下流にあたる）を溯っていく。

○「黔中」黔州の郡名に當たる「黔中郡」のこと。詩題の「黔南」と同一の場所であり、「黔中道」（岡村繁『白氏文

集』四「竹村則行執筆」)ではない。田中克己『白樂天』等が、「唐の道名」とするのも、同じ誤りである。唐代後期の詩歌では、しばしば郡名を州名の雅名として用いた。一例を挙げれば、杜牧の詩「齊安の城樓に題す」の齊安は、黃州の郡名「齊安郡」をいう。

○「爭去得」 この三字は、いずれも白話的表現。争は、反語を表す副詞。すでに一〇五番に見える。拙稿「補訂(三)」の補注参照。⁽²⁵⁾ 去は行く、赴く。これも白話である。また「得」は、可能を表す助字。動詞の後に付く「得」は、白話表現である。

○「磨圍山」 黔州の治所、彭水縣城の西にある山の名。後世、一般に「磨圍山」と書かれた。南宋の王象之『輿地紀勝』卷一七六、夔州路黔州の條にいう、磨圍山は「彭水縣の西に在り。江(黔江)を隔てて四里(二キロ強)、州城と對面す。夷・獠(當地付近に住む異民族)は、天を呼びて圍と曰ふ。此れ、天を磨するを言ひ、號して磨圍と曰ふ」と。この記述は、南宋の祝穆編、祝洙補訂『方輿勝覽』卷六(〇)、夔州路紹慶府の條にも、ほぼ同様に見える。白詩「磨圍山」の磨は、「摩」と音通し、貞和本・建長本・逸翁本等の『和漢朗詠集』⁽²⁶⁾には、磨圍山に作っている。いずれにせよ、當地の方言を用

いて、高くそそり立って天空に接する山、の意をこめた命名である。それは、「黔南縣の山」(川口注)、「黔州の南方一帯にある山」(大曾根注)ではない。岡村繁『白氏文集』四によれば、「高さ五七六メートル」の靈山であった。白居易は同年の作「嚴中丞(謨)の 晩に黔江を眺めて寄せらるるに酬ゆ」のなかでも、「磨圍山下の色」云々と歌う。この二例が、唐代以前、詩中に詠まれた磨圍山の全てであろう。

○「蒼蒼」 「アヲシロナル兒」(永濟注)、⁽²⁷⁾ 「月の青白い色の形容」(西村富美子『白樂天』)。白詩には、さらに「新霽月蒼蒼たり」(渭村退居…)卷一五、「沙冷ややかにして月蒼蒼たり」(江南喜逢…)、『箋校』外集上、江州司馬在任)などと詠まれる。津阪孝綽『夜航詩話』卷四の、「蒼は灰慘色を謂ひ、青・緑と義異なれり。蒼松・蒼竹・蒼蒼の語は、皆な黯慘の意有り。……『詩』の秦風に『蒹葭蒼蒼、白露霜と爲る』と。『釋文』に云ふ、『蒼々は物老いるの状なり』と。蓋し光澤盡きて蒼白なり」も、参考にならう。李紳の詩「晏安寺」(新樓詩二十首の二)は、「啼鳥歇む時 山寂寂たり、野花殘する處 月蒼蒼たり」とあり、王旋伯『李紳詩注』⁽²⁸⁾には、蒼蒼を「灰白色」と注する。

●二六一番 皇甫冉「秋日東郊の作」「燕知社日辭巢去、菊爲重陽冒雨開」

○本詩は、至徳元載（七五六）から大曆十四年（七七九）に到る名詩を集めた、高仲武編『中興閒氣集』巻上に見えるほか、上掲の二句は、編者高仲武の評語の中にも皇甫冉の名句の一つに選ばれている。さらに晩唐の光化三年（九〇〇）の自序を持つ韋莊編『又玄集』巻上にも收められている。『千載佳句』時節部・重陽には、作者の名を「李端、或云皇甫冉」とし、傳存の古い『和漢朗詠集』では、内閣文庫藏『私注』や『六注』を始めとして、李端の作とするものが多いが、今日の通説に従って皇甫冉の作と見なすべきである。空海編『文鏡秘府論』天卷・調聲にも、「皇甫冉曰」として七律全編が引かれ、『文苑英華』卷三一九、村墅の條にも、皇甫冉の作として見えている（明版）。ただし詩題は、「秋日冬郊作」に誤る。

本詩は、①第七句に「淺薄 何を將て 獻納（諫官「拾遺・補闕など）」に稱はん」とある、②獨孤及の「唐の故の左補闕安定の皇甫公（冉）の集序」（四部叢刊『毘陵集』卷二三）に、皇甫冉は「大曆二年（七六七）、左拾遺に遷り、右（原注…文粹作左）補闕に轉る。使ひを江表（江南）に奉じ、因りて家

『和漢朗詠集』所収唐詩注釈補訂（十五）（植木）

を省して（歸省して）丹陽（潤州の郡名、治所は江蘇省鎮江市）に至る。……不幸にして短命、年方に五十四にして没す」とあること、この二點によって、本詩は大曆二年以後の作となる。これは、『中興閒氣集』の選録範圍とも符合する。

ところで陶敏・李一飛・傅璇琮『唐五代文學編年史』（中唐卷）の考證によれば、皇甫冉は、大曆二年、左拾遺になった後、同三年、左補闕（一説に右補闕）に遷り、同四年、左補闕在任のままに江南に使いし、冬、歸省して丹陽に到り、病床に臥した。同五年の春、「陸鴻漸（羽）の 越に赴くを送る」詩を作り、秋には潤州刺史樊晃と唱和、さらに年末の十二月には韓洄に對する唱和詩を作っており、ほぼ大曆六年（七七二）の春、五十四歳で丹陽の地で没したようである（七一八生〜七七二没）。

同書は、本詩「秋日東郊の作」の作成年代についても觸れている。大曆三年（七六八）九月、「皇甫冉在長安、轉官左補闕、有詩言懷」の條に、本詩の後半を引いていう、「冉は大曆四年の冬には、すでに（故郷の）潤州に歸っているのです、彼が拾遺から補闕に遷ったのは、本年（大曆三年）のほうです。詩から冉が當時、獻納（君主に忠言を奉ること）の任にあったことがわかる。すなわち補闕に轉任したことに感じて

作ったものか」と。この説に従えば、没する三年前の五一歳
のときに成り、江戸初期の説心和尙『三體詩素隱抄』巻七の
「詩ハ、長安ノ東郊ノ作ソ」とも符合しよう。⁽³³⁾

しかしこの説には、にわかに賛同できない。というのは、
本詩の頷聯「廬嶽（東林寺・西林寺等の名刹がある廬山。江西省）
の高僧 偈を留めて別れ、茅山（道教の聖地の一つ。江蘇省句
容市の東南）の道士 書を寄せて来る」と歌われる廬嶽・茅
山が、「單に僧や道士に對する修飾語」（村上哲見『三體詩』上）
とは考えにくく、それなりの往來を踏まえた表現のように思
われるからである。この判斷に従えば、すでに故郷の丹陽
（鎮江市付近）に歸省した後の作となろう。本詩の結びに、辭
任か歸隱かに思いまどう心境を、「岐に臨んで 終日 自ら
徘徊す」と詠んでいることを考えれば、病氣がちのまま左輔
闕の官にあったときの作になる。「多病 官を辭して罷む」
（「閑居の作」）る前の、大曆四年（七六九）、五二歳ごろの作と
なるうか。いづれにせよ、作者最晩年の作である。⁽³⁵⁾

○「燕知社日辭巢去」 唐代、社（土地の神）を祀る「社
日」には、春社と秋社の二つがあり、それぞれ春分・秋分に
近い前後の戊ちのえの日に行われた。「春ハ五穀生長ヲ神ニ祈リ、
秋ハ成熟ヲ神ニ祈ル日」（「假名注」）であった。官吏はこの日、

休みになる。拙著『唐詩歲時記』五九・二七一頁以下参照。
川口注（文庫）に、『禮記』月令、廣義、二月に、「立春後五
戊を春社となし、立秋後五戊を秋社となす」とある。⁽³⁶⁾これは、
柿村『考證』の「月令廣義、二月云」の注を受けた記述であ
る。「月令廣義」は『禮記』月令篇の注釋ではなく、獨立し
た一部の書物、明の馮應京撰、戴任注『月令廣義』二十四卷
（附二卷）を指し、前掲の語はそれぞれ、卷六、二月令の節
令「春社」、卷一五、八月令の節令「秋社」の條に分けて記
されている。⁽³⁷⁾萬曆三十年序刊本（東北大學圖書館藏）には、
「五戊」の下に「日」の字があり、『考證』はおそらく脱した
のであろう。川口注は孫引きゆえの誤解と思われる。ここで
は、もちろん秋社を指す。

元の郝天挺『註唐詩鼓吹』卷三には、「燕は、春社に來り
て、秋社に去る」とあり、書陵部本『朗詠抄』にも、「燕ハ、
此日ヲ知テ、春來テ、秋去ル也」という。こうした考えは、
唐代、廣く流布しており、「社燕」という言葉が、羊士諤ようしげ
「郡樓晴望」詩（其一）のほか、元稹・劉禹錫らの詩中にも
見える。また中唐の錢起「河南の陸少府を送る」詩の、「東
城の社日（秋社） 巢燕を催す」、白居易「秋池」（其二）の、
「社近くして 燕影稀なり」、杜牧「江樓晚望」詩の、「初め

て語る燕雛は 社日を知る」なども、同じ發想に基づく表現である。

○「菊爲重陽冒雨開」 菊は重陽節の花。ちなみに、「重陽の爲に」の「爲」(去聲)が、上句と對をなすことを考慮すれば、この爲は「謂」と音通して、上句の「知」とほぼ同義の「爲ひて」と讀める可能性も生じよう。

注

- (1) 伊藤正義ほか『和漢朗詠集古注釋集成』第一卷(大學堂書店、一九九七年)所收。
- (2) 『中國詩文論叢』第二集、二〇〇二年所收。
- (3) 大修館書店、一九九九年。
- (4) 講談社・學術文庫、一九九九年。
- (5) 伊藤正義ほか『和漢朗詠集古注釋集成』第二卷下(大學堂書店、一九九四年)所收。
- (6) ただし、本詩の後に、「此詩、本卷『中秋月』重出」云々の校記がある。
- (7) 堀部正二編著、片桐洋一補『校異 和漢朗詠集』(大學堂書店、一九八一年)の校語も参照。
- (8) 蔡鏡浩『魏晉南北朝詞語例釋』(江蘇古籍出版社、一九九九年)参照。

『和漢朗詠集』所收唐詩注釈補訂(十五)(植木)

- (9) 田中克己『白樂天』(集英社、漢詩大系)も誤る。
- (10) 『廣雅』釋言に「新、初也」とある。白詩「送兄弟迴雪夜」の「新與兄弟別」は、この例。
- (11) 注一の書の一〇一頁の校語による。
- (12) 『校異 和漢朗詠集』にも、「汗水東歸卽事」と題する二本をあげる。
- (13) 中華書局、一九八二年。
- (14) 中華書局、一九九二年。
- (15) 中華書局、一九九二年。
- (16) 『中國古典文學叢考』第二輯、復旦大學出版社、一九八七年所收。
- (17) 武藏野書店、一九八三年。
- (18) 勉誠社、一九八四年。
- (19) 岩波書店、新日本古典文學大系、『江談抄 中外抄 富家語』(一九九七年)所收。
- (20) 江蘇教育出版社、一九九〇年。
- (21) 陝西教育人民出版社、一九九六年。
- (22) 中華書局、一九八〇年。
- (23) 安徽大學出版社、二〇〇〇年。
- (24) 小島憲之『訓み』の一、二について(同『國風暗黒時代の文學 補篇』塙書房、二〇〇二年所收)のなかに、本詩を引いて、「南方貴州の黔南の地」云々というのも誤りである。

中國詩文論叢 第二十三集

- (25) 『中國詩文論叢』第九集、一九九〇年所收。
- (26) 注一の書の一〇一頁参照。
- (27) 伊藤正義ほか『和漢朗詠集古注釋集成』第三卷（大學堂書店、一九八九年）所收の、永青文庫本。
- (28) 上海古籍出版社・唐詩小集、一九八五年。
- (29) 四部叢刊『唐文粹』卷九二、「唐左補闕安定皇甫冉文集序」。
- (30) 遼海出版社、一九九八年。
- (31) この點は、賈晉華『皎然年譜』（廈門大學出版社、一九九二年）も同じ。
- (32) 『唐才子傳校箋』（第二冊）卷三、皇甫冉の條（傅璇琮執筆）は、大曆四、五年没と推定するが、『唐五代文學編年史』（中唐卷）や『唐才子傳校箋』（第五冊、補正）、皇甫冉の條（陶敏執筆）のほうがすぐれる。
- (33) 『集註』にいう、「題の心は長安の東郊に皇甫冉の私第あり。そこにての詩也」と。
- (34) 朝日新聞社、一九六六年。
- (35) 『唐詩鼓吹註解』卷三、明の廖文炳の解（和刻本）にいう、「此れ皇甫冉、詔を承けて將に出でんとして作るなり」と。これは、大曆四年（七六九）、江表に使いに出る直前の作、と見なす立場であろう。
- (36) 川口大系本は、戊を戌に誤っている。これは、柿村『考證』の誤りを承けたもの。大曾根注も戊を戌に誤る。『和漢朗詠集』の古注も、往々にして戊を戌に誤っている。
- (37) この本の調査については、東北大學院生の大山岩根氏に依頼した。その協力に深く感謝したい。